

# ロンドンのイメージ構築におけるセント・ポール 大聖堂の重要性, および京都への視点

野口 祐子

## はじめに

2007年9月1日, 京都市の新景観政策が実行に移された。全国に先駆けての広域な景観政策の実施である。今回, 景観条例という形で, まずは京都が都市としてどういう姿をとどめ, またこれから新たにどういう姿を形成していくべきかについての一定の方針が内外に向けて示されたわけだが, 早急に規制をかけて手を打たねば京都らしさが失われてしまうという危機感は, すでに1960年代に京都市中心部の相貌が大きく変わり始めた時代から広く市民に共有されてきた。2007年時点での条例施行は, 京都が都市計画においていかなるヴィジョンを持つべきかについての, 行政による意志表明として, 長く待たれていたものである。もちろん, いったんは規制緩和策を取りながら今さら遅すぎたという憤懣の声は聞かれるが, それでも国内で高まりつつある景観保護への取り組みに, 条例という形で実現可能性を高めることになったのは評価されるべきだろう。今後の実行力が注目されるどころだ。

景観政策では, 単に規制するというにとどまらず, その前提として都市景観とはどうあるべきかについての理想がなければならない。京都市ホームページの「新景観政策-時を超え光り輝く京都の景観づくり」は「50年後, 100年後も光り輝く京都を目指して」「1200年を超える悠久の歴史の中ではぐくまれてきた京都の優れた景観 / これからも歴史を積み重ねながら新たに形成していく優れた景観 / 時を超え光り輝く景観づくりを進めていきます / 京都がいつまでも京都であるために」というコピーではじまる。ページにあしらわれている写真は, 保存すべき景観の例として, 烏丸通のオフィス街を除けば古都のイメージを喚起する写真が多用されている。「新景観政策-5つの柱と支援策」は「建物の高さ・建物などのデザイン・眺望景観や借景・歴史的な町並み・屋外広告物」, そして「支援制度」からなる。そのうち, 眺望景観や借景については, 「京都には, 歌にも詠まれた優れた眺めが多くあります。良好な眺めや日本の文化としての借景は, 京都のみならず日本の財産です。全国で初となる「眺望景観創生条例」によって, 先人により守り引き継がれてきた38箇所の優れた眺望景観・借景の保全を図ります」とある。概して山に囲まれた京都の地理的特徴を都市景観の重要な要素と位置づけ, 自然景観との調和が重要視されていることが分かる。

これは京都に住んでいる者にとっては当然のこのように思われるのだが、実は都市の景観を考える上で、都市があたかも自然に抱かれているように感じさせることを重視しているのは貴重である。京都市により策定された眺望景観の保全リストには、世界遺産は当然として、五山の送り火という「しるし」への眺め、東山・北山・西山の眺めや河川への眺めが重視されている。特に山並みと河川の眺望が視対象として挙げられているのは、京都という都市の独自性を保護する上で不可欠なポイントとなるだろう。

京都市が挙げるこれらの眺望景観は「視点場」からの扇型の眺望景観を保護するために規制をかけるものである。これは、市中のある場所から眺められる風景が、その場所に立って眺めている人の興味をそがないような風景であるべきだという考え方だろう。比叡山の借景で有名な円通寺からの眺めが分かりやすい例だ。この「視点場」の考え方は、もちろん市民が誇れる景観の保全に役立つのだが、外から訪れた人々に美しい京都を見てもらいたいという、観光客のまなざしへの配慮もあるだろう。観光客の目に映る京都は「自然に抱かれた古都」という、京都に期待されるイメージ通りであるべきだ、という考え方が背後にはある。もちろんそれに異を唱えるつもりはない。ただ「歴史都市」を自覚する都市が、現代に生きる都市であることとどう折り合いをつけるのか、という簡単に答えの出せない問題がここにはある。

ここで「視点場」という発想に着目するのは、京都市におけるこの「視点場」が、見る者の目に、人工物によってできるだけ興味がそがれることなく自然の風景が映じることを重要視しているのを興味深く思うからである。たとえば二条城などの世界遺産を見学する人が、その歴史的空間に身をおいた時、周りに現代風の建物や広告が見えて目障りにならないように配慮すべきだという考え方が「視点場」の選定で表されていると思うのだが、それでは市内の様々な場所から二条城が見えるべき姿についてはどう考えるのか。それについては周囲の高さや広告の規制という配慮がなされるのであろう。つまり二条城がどう見えるかについては、視点場の考え方は適用されていない。街路から見た東寺の五重塔の眺望という例はあるが、モニュメンタルな建造物の多くが神社・仏閣といった、鳥居や門から奥まった場所にあり、木々に囲まれてあることが多いのも、街路からどう見えるべきか、離れた眺望地点からどう見えるべきか、という考え方にならない理由の一つだろう。

それ以前に「モニュメンタルな建造物」という考え方自体が馴染まないかもしれない。おそらく豊臣秀吉が造らせた方広寺大仏殿と徳川時代の二条城天守を例外として、都市の内部に周囲を睥睨する巨大建造物が壮観を呈する、といった発想で京都の町は創られてこなかった。方広寺は高さ52メートル、洛中洛外図屏風の中には大きく目立つ姿で描かれている。これは京都の名所であったが、その方広寺も都市中心部に聳え立つのではなく、東山に抱かれてあった。二条城の天守は1750年の落雷で焼失して以後、再建されなかった。徳川の政権が安定し、京都の町に睨みをきかす権力のシンボルを建てる必要がなかったということだろう。高さという点ならば、東寺の五重塔は京都の南口にあって、1964年に131メートルの京都タワーができるまでは、そびえ立つイメージであっただろう。現に今日でもテレビ番組では、話が京都の町に移るのだと視聴者

に伝える手っ取り早い「絵」として五重塔を画面に使うのが倣いになっている。しかし東寺の五重塔は江戸時代にはモニュメンタルな建造物としてあまり認識されていなかった。江戸初期の『出来斎京土産』（1677）、元禄時代の『花洛細見図』などでは五重塔より堀際の松の方がりっぱに見える。それが明治時代となり、西洋絵画的遠近法が取り入れられると、高さが強調される図が見られるようになる（『京華要誌』1895）<sup>(1)</sup>。五重塔をモニュメントとして認識するまなざしここに窺える。この図が描かれた1895年は京都岡崎で第4回内国勸業博覧会が開催された年だった。「外からのまなざし」と呼ぶべき外国からの視線を意識した京都となったのが分かる。『京華要誌』は「新しい京都像を日本内外に紹介する」ために京都市参事会が編纂した公式の京都地誌であり、近代の京都案内記のモデルともなった（森谷239）。

明治時代以降、東寺の塔をモニュメントとして提示するようになったのはヨーロッパ的発想からの影響ではないだろうか。木造の塔としては57メートルという日本一の高さを持つが、しかし東寺を弘法大師信仰の地と見なしていた江戸時代の人々にとって、東寺の塔がそれほど威容を誇るランドマークと認識されていなかったように、周囲を睥睨する建物ではない。

聳え立つ建造物が都市のシンボルとなるヨーロッパの都市との違いを念頭におく時、「視点場」についての認識の違いは当然のものかもしれない。その違いも含めて、「視点場」の発想がどう考慮されてきたかを検討することは、京都の今後について考える上でも一助となるのではないか。そんな思いから、この小論では、ロンドンにおける「視点場」の発想と都市のイメージについて考えたい。考察の中心となるのは、ロンドン旧市街シティ地区に建つセント・ポール大聖堂である。

## 1 象徴としてのセント・ポール大聖堂

ロンドン中心部のテムズ川南岸サウスバンクから北を見渡すと、ロンドンのスカイラインが歴史の長きにわたって中層に保たれてきたのが分かる。しかし同時に旧市街シティに林立するクレーンや東方の超高層ビル群にも目は引きつけられる。ロンドンは今、再開発ラッシュのように見える。この都市は一体どうなっていくのか。急速に大きな変貌を遂げるのか、気になるところである。

ロンドンを観光する人はセント・ポール大聖堂にも立ち寄るだろう。確かにそこは観光スポットだ。しかし日本からの観光客にとって、テムズ川沿いに建つビッグ・ベンの時計塔で有名な国会議事堂やその近くに建つウェストミンスター・アビィ、同じウエストエンドにあるトラファルガー広場のようなロンドン西部の観光スポットに比べると、金融街シティに建つセント・ポール大聖堂は観光の目玉にはなっていない。ガイドブックの表紙に使われる写真も、テムズ河畔の国会議事堂あるいはタワー・ブリッジの方が多いだろう。両者がゴシック様式の外観によって古さを演出しているが実は19世紀中期から後期に建てられたにもかかわらず、古いロンドンの顔として広く認められている。セント・ポール大聖堂が17世紀から18世紀初期にかけての建築であ

り、その場所と建築されるに至った経緯とその姿が、ロンドンの歴史に深く根ざしているにもかかわらず、その建物自体はイタリア風の外観のために、ロンドンに馴染みのない人にはひと目でロンドンの顔と認識しにくい。

しかしイギリスの人々にとってはセント・ポール大聖堂が建てられて以来、その姿こそがロンドンの顔であった。そこで、なぜセント・ポール大聖堂なのか、まずこの疑問から考えてみたい。

### イギリスの伝統とセント・ポール大聖堂

はじめに1980年代にベストセラーとなった青春小説の一節を引用しよう。*The Secret Diary of Adrian Mole, aged 13 3/4*はもうすぐ14歳になるモール君の秘密の日記という体裁をとっている。政府への不満を日頃口にする失業中の父をはじめ、自称社会主義者や自称共産主義者の大人たちに囲まれて、近ごろ反体制的な考え方が芽生えてきたモール君だが、そんな少年の心にも、国家的行事に関しては一般に受け入れられているイメージが浸透している。皮肉屋を気取っていても、その特別の日にははしゃぐ気持ちが抑えられないようだ。

7月29日水曜日

王室結婚式の日!!!!

イギリス人であるってのはなんて誇らしいんだ!

外国人は羨ましくてたままないだろう!

祝祭式典にかけては世界中でイギリスの右に出る国はない! (Townsend 134)

モール君はイギリスの地方都市に暮らしている。チャールズ皇太子とダイアナの結婚式で盛り上がる1981年7月、モール君一家が住むあまり裕福ではない郊外住宅の並ぶ通りでは、祝賀のためにみんなで派手に飾り付けをして、ご近所集まってのパーティの準備をしている。一家とその友人たちは結婚式のテレビ中継を一緒に観るために居間に集まり、式典後はサッチャー政権への不満も忘れてパーティで盛り上がる。当時の弱者切り捨て政策への不満が渦巻いていた社会において、王室の結婚式が愛国的国民感情を高めるのに役立ったことが、この日のエピソードで皮肉に描かれている。

イギリスの公衆による「王室ページェントや見せ物への嗜好が、減るところかむしろ増えている」20世紀後半の時代において、新たな「伝統の創出」が図られ、儀式がいよいよ入念に行われることによって、「千年の伝統」にのっとっているイギリスの安定性と不変性を演出する(キャナダイン233)。キャナダインは、このような自分の研究が明らかにした英国王室儀礼の変容に関する論考が「大規模な式典の際には、きまってまことしやかに「千年の伝統」を語ってきた解説者やジャーナリストたちを驚かせるかもしれない」と述べている。モール君が王室結婚式のテレビ中継で経験した高揚感は、単に一少年の感想にとどまらず、国民による国家イメージの受

容の典型例として、まさにキャナダインが指摘する文脈で理解できる。

チャールズ皇太子とダイアナの結婚式が挙行されたのはセント・ポール大聖堂であった。ロンドンには王室と関係深い聖堂として、ウェストミンスター・アビィとセント・ポール大聖堂があるが、前者が王室ゆかりの菩提寺院的な位置づけであるのに対し、ロンドン旧市街に建つセント・ポール大聖堂は、ロンドン市民と王室の絆と国家の誇りを演出するために重要な場所である。

### イギリスの中心はどこか

イギリス人が、この場所こそイギリスの中心と考える場所とはどこか。

歴史を遡ってみよう。シティは古くから自治都市としての誇りを持っていた。11世紀にはすでに自治特権を得ている。ロンドン観光スポットのひとつ、シティ東のテムズ川沿いに建つロンドン塔は、そもそもは王が外敵に目を光らせると共にシティを牽制する目的で造ったものだった。ロンドン西部が開発されるまではロンドン市民にとって、シティこそがロンドンだった。そしてロンドン大火でシティの大半が焼けた後にクリストファー・レン（1632-1723）によって新しいセント・ポール大聖堂が建てられると、このロンドンの街で抜きん出て高い大聖堂が、ロンドンの中心として認識されるようになった。

セント・ポール大聖堂はイギリス国教会の大主教座のある教会である。イギリス国教会の首長は国王であるから、王権との関わりは深い。しかし同時にシティに聳える大聖堂は王権から独立した自治都市としてのシティの誇りでもあった。

19世紀に入ると、18世紀以来盛んであったイギリス上流階級の子弟のヨーロッパ大陸長期旅行、いわゆるグランド・ツアーで大陸の主要都市に滞在する機会が増えた富裕なイギリス人や、イタリアへ留学した建築家たちから、ロンドンが首都としての威厳を備えていないことを嘆く声が多く上がっていた。その中でひとときわ深刻に首都としての華麗さの欠如を嘆いたのが、当時ロイヤル・アカデミーの建築学教授だったジョン・ソーンだった。ソーンは開発の余地のある空間を残しているロンドン西部に、壮麗な建造物を連ねた国王行幸路を造ることを夢見た。当時の摂政（1811-20）であり1820年から国王となったジョージ4世は、自らの行幸を華麗に演出するこの計画を大いに気に入った。ソーンはこの国王行幸路を中心とした首都改造計画を何度も発表した。それは実現へと向かうことはなかった（Sawyer 252-63）。まるで古代ローマを再現するような都市のイメージは、美しくとも現実的ではなかった。費用がかかりすぎるのが一番はつきりとした原因である。またその廃虚的イメージは、19世紀に生きる都市のイメージとしてはあまりにも夢想的すぎた。しかしここで興味深いのは、推測される第3の理由、すなわちソーンが目指したのが、王権を中心としたロンドンの都市改造だったことが、時代とずれていたのではないか、という点である<sup>(2)</sup>。つまり国民のアイデンティティを表象する場所は、王権を象徴する場所ではないと一般に認識されていたのである。

それならばイギリスの中心はどこか。それはバッキンガム宮殿でもなく、国会議事堂でもなく、

セント・ポール大聖堂であるとみなす言説が20世紀のはじめまで繰り返され続けた。19世紀以来その場合の中心とは、イギリスの中心のみならず大英帝国の中心を意味していた (Daniels 29; 232)。またルンドの「帝国の中心」(*The Heart of the Empire*) と題された1904年の絵がいみじくも語っているように、イギリスの海外覇権が揺るぎなかったヴィクトリア朝から20世紀のはじめまで、王権でもなく、政府でも国会でもなく、シティの金融街が大英帝国の心臓部と見なされていた (図1)。シティの金融界が帝国の心臓に財政上の養分を送り続け、同じシティにあるセント・ポール大聖堂は、イギリス国民の精神的な中心としての象徴空間的役割を担わされた。



図1 *The Heart of the Empire* by Niels Moeller Lund, 1904. Guildhall Library. 王立取引所からのシティ中心部の眺め。中央右後方にセント・ポール大聖堂が見える。

19世紀のはじめ、ナポレオン戦争に勝利したイギリスは世界一の強国となった。トラファルガー沖での対フランス戦を勝利に導いた海軍の英雄ネルソンを称え、国家の誇りを視覚化する場所として、トラファルガー広場が建造された。トラファルガー広場はイギリス国土測量の原点ともなっている、文字通りイギリスの中心である。しかし広場の中心にそびえ建つネルソン記念柱が周囲の王侯の銅像を見下ろす配置に象徴的に現れているように、その空間は王室のための祝祭空間ではなく、政府のための空間でもなく、国民のための空間の趣が強い。古代ローマのトラヤヌス帝記念柱を模したパリのヴァンドーム広場の記念柱にはローマ皇帝姿のナポレオンが乗っている。それに比して、ネルソン記念柱上のネルソンは海軍提督の軍服姿であり、一軍人として記念されている。その違いが、広場の性格を決定づけている。トラファルガー広場は19世紀から民衆の集会に利用されてきた。愛国的な集会の場合もあるが、労働者のデモ行進、女性参政権運動など、体制批判の集会が結集するのはトラファルガー広場であった。

そもそもネルソン記念柱は43.5メートルだから、広場の中では圧倒的な存在感があってもロン

ドンのどこからでも見える高さではない。それに対してセント・ポール大聖堂のドーム先端までは110メートルあるから、ランドマークとして愛されるのもよく分かる。しかしその理由だけでなく、セント・ポール大聖堂は、19世紀前期に整えられたトラファルガー広場にはない歴史的積層性を持った場所として、自治都市シティという市民文化の誇りと大英帝国の誇りを結びつける場所として機能した。

1897年6月、ロンドンにはヴィクトリア女王の即位60周年記念に沸き返っていた。祝賀の盛大な行列がバッキンガム宮殿を出発して、式典の行われるセント・ポール大聖堂に向かった。周辺は華やかに飾り付けられ、大聖堂正面は祝祭劇場と化した。大仕掛けの式典に人々は魅了され、愛国的感情が国民の間に高まった。モール君が経験したのは、およそ80年後のイギリスにおいて、テレビ中継という強力なメディアの力を借りて世界中に発信された、同様の「イギリスらしさ」の演出であった。

19世紀後半はイギリスだけでなく、ヨーロッパ列強が首都を舞台に、国家のアイデンティティを自国民と外国に印象づけるために、国を挙げての式典がますます派手になり洗練されていった時代である（Daniels 29-31; キャナダイン194-95）。現在の観光客が目にするイギリスは、このような儀式がずっと昔からお得意だった国のように見えるが、実際は19世紀の前半まで、イギリスで行われる式典は荘厳さに欠けるお粗末なものだった（キャナダイン177）。変化は政府主導の帝国主義が強化すると同時に王権が弱体化していく19世紀後半に起こった。19世紀を通じてイギリスでは、王権の政治への介入力が弱まるにつれ、王権の象徴性が強まっていった。先に触れた1897年のヴィクトリア女王即位60周年の時点では、イギリス政府の要請で1870年にインド皇帝に即位した女王は大英帝国の象徴であった。即位60周年の記念式典は、本来王室行事であるものが、帝国の行事として祝われた（キャナダイン190）。式典嫌いだったヴィクトリア女王も王冠、王笏、宝珠で王室の伝統を誇示し、セント・ポール大聖堂の聖職者たちは200年ぶりに豪華な正装に身を包んで儀式を執り行った（Daniels 29-30）。しかしそれが創出したのは王権を中心にした国家アイデンティティではなかった。セント・ポール大聖堂は、シティの経済力によって確立した大英帝国の象徴的中心という役割を果たしたのである。

## 2 都市景観の中のセント・ポール大聖堂

前節で考察したように、セント・ポール大聖堂は19世紀後半からは国家のアイデンティティを支える場所として機能するようになった。第2次大戦でのドイツ軍によるロンドン空爆で市内が大きな被害を受けたにもかかわらず、地元消防団の活躍でセント・ポール大聖堂だけは被害を免れた。爆撃の煙の中に佇む大聖堂のドームのニュース写真は有名であるが、この1枚の写真が戦時下の国民を鼓舞するに十分なイメージであった。聖堂の周囲が焼夷弾で焼き尽くされても、聖堂だけは「生き残った」ことが国民を精神的に支えた。このことは重要文化財の一つが損壊を免れたというに終わらない。それほどセント・ポール大聖堂は守られるべき存在であり、人々を

支える存在だったのだ。ただしそれはイギリス国教会の宗教施設という意味合いや信仰の場という意味合いにおいてではなかった。

この大聖堂にはレンの設計で建てられた18世紀初期以来、各時代のロンドンのイメージが投影されてきた。この節ではセント・ポール大聖堂が、各時代にどのような象徴的存在としてイメージされてきたかを考察する。それぞれの時代に関心の中心となったのは、セント・ポール大聖堂がロンドンの市中からどう見えるか、後世の人にどう見えるか、外国人にどう見えるか、という問題である。これは「まなざし」の問題を含んでいる。ロンドン市民がロンドンをどんな都市として認識しているか、またどんな都市であってほしいと思っているかという「内からのまなざし」、そして国内や海外からロンドンを訪れる人々の目にロンドンがどんな都市として映じているか、どんな評価を受けているか、また受けるべきかという「外からのまなざし」の双方に関わる意識が、セント・ポール大聖堂の姿をさまざまな角度から捉えてきた。ここではその主だったイメージについて検討する。

#### 描かれたセント・ポール大聖堂

セント・ポール大聖堂がどのように描かれたかを見ると、描かれた時代の関心や美意識が見えてくる。18世紀にはカナレット (Canaletto, 1697-1768) をはじめとするイタリア人画家の都市風景画がイギリス富裕層の間でもてはやされた。

カナレットは1725-40年にかけてヴェニスの水辺の景観を集中的に描いた (Lyster 58-59)。グランド・ツアーでヴェニスを訪れたイギリス人の金持ちが彼の絵をこぞって買って帰った。私たちが旅先で写真を取るのと同じく、旅の思い出として持ち帰ったのである。そんなわけでカナレットはロンドン社交界ですでに有名であった。イタリア風の風景画が売れるのを見込んでロンドンにやって来たカナレットをはじめとするイタリア人画家がテムズ川周辺の景観を描くや、大変な人気を博した。これらの絵は、ロンドンとテムズ川がイタリアの都市の景観に匹敵するという自信を人々に与え、イタリア人画家はロンドンのイメージの生成に大きな貢献をした (Galinau and Hayes 73)。

イギリス人にとって憧れの国イタリアの都市美がロンドンのイメージに取り込まれた例を幾つか引こう。

一つ目は18世紀に流行った「カプリッチオ」という絵画である。「奇想」と訳せる‘capriccio’は平たく言えば、実際の風景に想像上の風景を組み合わせ、実際よりも心地よい風景を創出する絵のことだ。イタリア絵画で流行ったが、ここではそのロンドンにおける応用の例を見よう。図2はイギリスの画家がイタリア風に描いたカプリッチオである。ロンドンのセント・ポール大聖堂と一目で分かる建物の前景にヴェニスの運河が流れている。これが本当ならシティーは大洪水だ。二つ目もやはり「カプリッチオ」で、ロンドンと言えばセント・ポール大聖堂、という遠景であるが、前景に描かれるのは実在しない巨大なアーチ付きの橋である (図3)。橋上では富裕な人々が優雅に散策を楽しみ、景観を愛でている。ここには強国となったイギリスの首都ロ



ンドンへの愛着と、かつて海外貿易で栄えたヴェニス都市美を取り込んでロンドンの美観を高めたいという欲望が見える<sup>(3)</sup>。そしてロンドンの都市美を視覚化する際に遠景に入れられるのがセント・ポール大聖堂なのである。

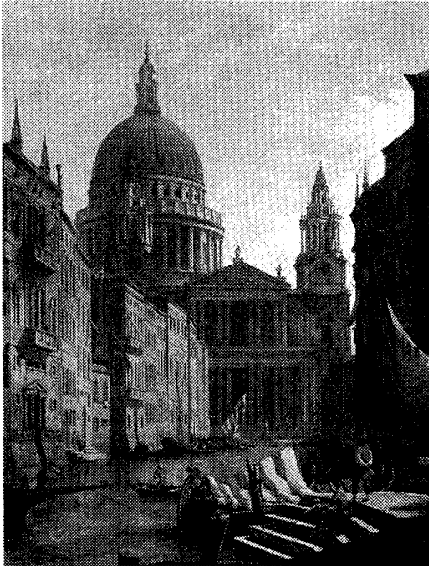


図2 *Capriccio: St. Paul's and a Venetian Canal* by William Marlow, c.1795? Tate Britain.

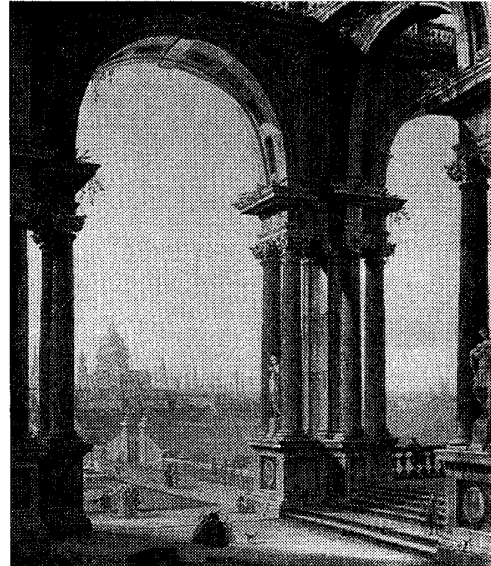


図3 *Capriccio Bridge* by Antonio Joli (c.1700-1777). Private collection.

### 眺望論争の中心としてのセント・ポール大聖堂

このように、セント・ポール大聖堂はロンドンを視覚化する際に、むしろ遠くから見られるべき建造物としてある<sup>(4)</sup>。第2次大戦まで高層ビルが少なかったロンドンにおいて、どこにいてもその存在が確認でき、一目でロンドンの景観だと分かるランドマーク的建造物として認識されている。しかしセント・ポール大聖堂の存在意義はそれだけではない。もしその姿が他の建造物で隠されたりすれば、それは単にランドマークが見えなくなったという以上の反応を人々に引き起こす。大聖堂の眺望はロンドンへの愛着と誇りと切り離せないのである。

セント・ポール大聖堂がレンによって再建されたのは、ロンドン大火(1666)でゴシック様式の旧大聖堂が焼け落ちたからだだが、大火の翌年には「ロンドン建築物法」が制定されて、4階建てを上限に定めた。これは防災上の理由が大きかったが、建物の高さを制限する考え方がすでにこの時点のロンドンに生まれていたのである(福川他 67-68)。その後も高さ制限の考え方はロンドンに定着し、20世紀に入ってニューヨークが摩天楼の都市になる時代となってもロンドンでは高層建築に対する反発が根強く、景観論争が盛んに行われた(福川他 69-72)。その際に論争の中心となったのがセント・ポール大聖堂への眺望であった。大聖堂がどう見えるべきかという眺望の問題は、ロンドンがどう見えるべきか、帝国の首都がどう見えるべきか、という問題と分かちがたく結びついていた。

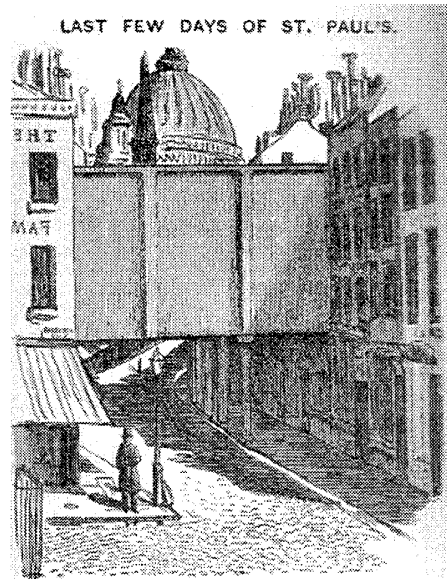


図4 *Last Few Days of St. Paul's. Punch, 8 August 1863.*

19世紀において眺望論争で一役買ったのが*Punch*誌である。図4は1863年にシティ中心部のラドゲイト・ヒルに鉄道の高架橋ができる時、それがセント・ポール大聖堂への眺望を隠してしまうことを憂えた漫画である。それにはこんなコメントがついている—「まもなくこの素晴らしい建物の姿は、知性の進歩と商業の躍進が首都に強要した偉大なる開発のために見えなくなるだろう」。これは利便性重視の開発のために、今やセント・ポール大聖堂をはじめとするロンドンの歴史的景観が末期的姿をさらすことになるという皮肉である (Bills 184)。

ただしロンドン中が反対したわけではないらしい (蛭川他 459)。セント・ポール大聖堂という歴史的建築を背景に、高架橋を煙をはきながら力強く進む汽車の姿に興味を見出す人々、そこにロンドンの活気と文明の偉大さを見る人々もいた (Daniels 25)。古いものと新しいものの取り合わせにはいつも、景観の破壊を憂える声と新鮮さを歓迎する声上がるものだ。

もう一つ*Punch*から例を引いておこう。図5には、「絵になるロンドン、現代の空中広告の眺め」という題が付いている。ロンドンの眺望がけばけばしい広告の氾濫によって損なわれていることを皮肉る図である (Daniels 27)。屋上広告やアドバルーンがロンドンの空を埋め尽くし、セント・ポール大聖堂の存在がかすんでいる。実際ここまでぎやかな空になってはいなくとも、巨大広告が景観を損なう時代になっていた。その現状に対して、世界経済の中心地という誇りは歴史的景観によって視覚化されるべきで、活発な商業主義によって視覚化されるべきではない、という考え方が根強くあった。そしてそれは今日までシティの景観を考える上で受け継がれてきたのである。

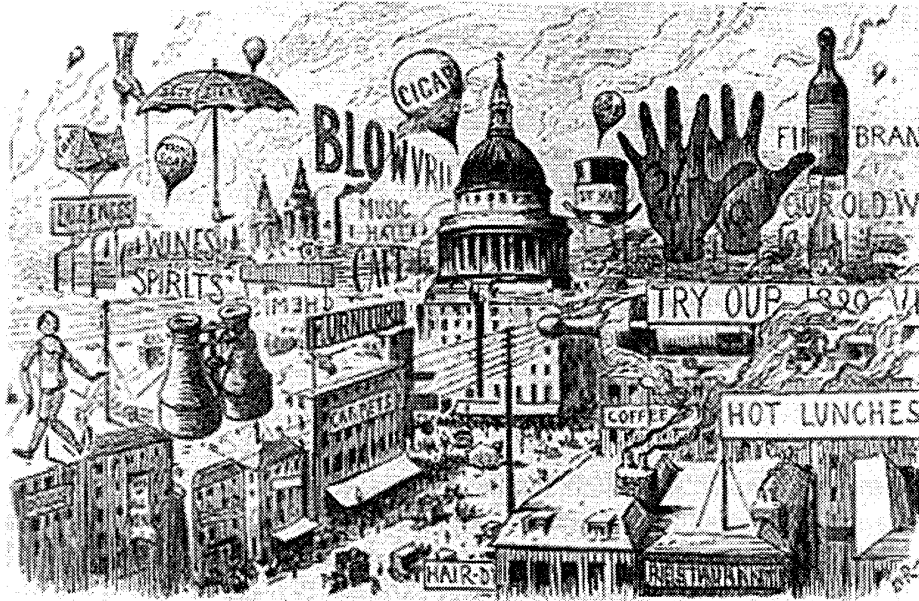


図5 *Picturesque London: or, Skysigns of the Times. Punch, 6 September 1890.*

### 「セント・ポールズ・ハイツ」

ニューヨークに代表される超高層ビルと巨大広告の時代となって、セント・ポール大聖堂自体を保存するだけでなく、シンボリック的存在である大聖堂のドームがよく見えるように眺望を確保することが緊急課題と認識された。その考え方が1937年に提案された“St. Paul's Heights”（セント・ポールズ高さ規制）という眺望保護と高さ規制に結実した<sup>(5)</sup>。建築技術とエレベーターの開発によって超高層ビルが可能になって、シティが摩天楼都市になる可能性が現実のものとなり、実際にいくつかの建築計画が発表された時、シティは摩天楼都市にならない選択をしたのである。

第2次大戦後のロンドン再開発で、超高層ビルの建築が盛んになった時期が何度かあり、現在も超高層ビルの建設を推進する意見と抑制の必要を説く意見にロンドンは二分されている。その中で1992年からは「戦略的眺望」の保護が定められた。これはシティ内を保護対象とした「セント・ポールズ高さ規制」を下敷きにして、保護範囲をロンドン全域に拡大したものである。2002年、シティの自治体は「セント・ポールズ高さ規制」の考え方を軸とした眺望保護を盛り込んだ“City of London Unitary Development Plan 2002”を発表した<sup>(6)</sup>。その「補遺—セント・ポール大聖堂と大火記念塔の眺望」に「セント・ポールズ高さ規制」の意義と歴史が以下のように説明されているので、その一部を私訳で引用しよう。

- 1.1 セント・ポール大聖堂はロンドンのスカイラインにおいて国際的に認知されている建築である。1938年以來、シティ自治体はテムズ川南岸、テムズにかかる橋、そして北方、西方、南方からの重要な眺望を保護し、改善するために「セント・ポールズ高さ規制」として知られる独自の政策を展開してきた。「セント・ポールズ高さ規制」の長期にわ

たる一貫した実行によって60年以上にわたって保護すべき眺望が守られ改善されてきた結果、ロンドン市民にもロンドンを訪れる人々にもその恩恵が享受されている。

- 1.4 「セント・ポールズ高さ規制」は近隣に建てられる高層建築物が重要な眺望を損なう恐れが出てきた1930年代にセント・ポール大聖堂の建築技師だったW. ゴドフリー・アレンによって考案された。1930年の建築物法によってユニレヴァー・ハウスやファラディ・ハウスのような高層建築が建てられるようになり、大聖堂南方と西方からの見慣れた眺望が損なわれたことに対して世論の非難の声があがった。ゴドフリー・アレンは現存する眺望を測量し、大聖堂のドーム・西塔と南方からの全面の眺望を保護するため建築物の高さ規制をすべき地域を設定した。[以下省略]

(“Supplementary Planning Guidance: St Paul’s & Monument Views.” p.5)

これらの規制は法的な力を持たなかったにもかかわらず、開発業者との「紳士協定によって」一部の例外はあるもののよく守られてきたと、「セント・ポールズ高さ規制」の効力が高く評価されている（「補遺」 p.5）。

#### 「戦略的眺望地点」

好景気を反映して超高層建築容認への声が上がってきたのを受けて2002年に発表されたプランは、この「セント・ポールズ高さ規制」を下敷きに、8箇所の「戦略的眺望地点」を設定している。その設定によって、かなりの距離からでもセント・ポール大聖堂の姿が望めるように配慮し、また大聖堂周辺の建造物についても、眺望地点と大聖堂の間にある建造物に関して、大聖堂の姿を損なわないように、大聖堂が目立つように配慮することが求められる。その実現のために、新しく建設されるものについても現在視界を遮っている建造物の建て替えの際にも、高さだけでなく大きさや色・材質までも規制をかけるものである。

そこで興味深いのが、この8眺望地点の選択である。「補遺」を読む限りではなぜこの8箇所なのかについての説明はない。8箇所のうちには、セント・ポール大聖堂からずいぶん離れた地点も含まれている。以下に「補遺」に列挙された8つの「戦略的眺望地点」を挙げる。

眺望地点1：グリニッチ・パークからセント・ポール大聖堂の眺め

2：グリニッチのブラックヒース・ポイントからセント・ポール大聖堂の眺め

3：ウェストミンスター棧橋からセント・ポール大聖堂の眺め

4：リッチモンド・パークの「ヘンリー8世の築山」からセント・ポール大聖堂の眺め

5：カムデン地区のプリムローズ・ヒルからセント・ポール大聖堂の眺め

6：カムデン地区のパラメント・ヒルからセント・ポール大聖堂の眺め

7：カムデン地区のケンウッド・ハウスからセント・ポール大聖堂の眺め

## 8：アレクサンドラ宮殿からセント・ポール大聖堂の眺め

この他に5，6と同じくプリムローズ・ヒルとパーラメント・ヒルからテムズ河畔に建つ国会議事堂の眺めも合わせて，計10箇所の保護すべき眺望地点が定められている。

これらの眺望地点はなぜ選ばれたのか。眺望地点6と7はロンドン北部の広大なハムステッド・ヒースの公園にある小高い丘陵で，18世紀以来，文人や画家が好んで住み，そこから見るロンドンの眺めが人々に愛された場所である。眺望地点がロンドンとの関係に深い歴史を持っている。

眺望地点1は，グリニッチ・パークに建つウルフ將軍像あたりから見えるセント・ポール大聖堂の眺望を保護しようとするものである。近景にはテムズ川の流れが視界に広がる。その視界に今後も開発の進む地域が入っている。開発の際には，高さ・かたち・色・材質について配慮が求められる。

しかしなぜこの場所が選ばれたのか。この場所も，長らくテムズ川とグリニッチの近景と，セント・ポール大聖堂を遠くに見やる遠景からなる景観をめでもてられてきた場所であり，その歴史的価値を重視していると思われる。ダニエルズによれば，19世紀に「絵画によく描かれたのは，グリニッチから大聖堂のドームが，レンの設計によるグリニッチ・ホスピタルの2つの塔の間から遠く霧に煙って見える眺望だった」(Daniels 25)。実際，イギリスが誇る風景画家ターナー(1775-1851)の1809年制作「グリニッチ・ヒルからのロンドンの眺め」は塔の配置は少し異なるが，初期の傑作として知られている(図6)。



図6 *London from Greenwich Park* by Joseph Mallord William Turner, 1809. Tate Britain.

この眺望は、単に絵になる風景というばかりではない。中世からグリニッチはロンドンを見渡せる地として有名であり、テムズ河畔には宮殿が建てられた。また王立天文台の建つ場所であり、1884年の国際会議でグリニッチが経度ゼロと定められて、地図の上でもロンドンが世界の中心となった歴史がある。その丘からはターナーが描いたように、セント・ポール大聖堂のドームが地平線上に見え、そもそもは宮殿として構想されたレンの手になるグリニッチ・ホスピタルの2つのドームが近景に見えて、イギリスが誇る文明の威容と歴史を視覚化している。テムズ川は世界一の首都と海外を結ぶ動脈として、その水辺の景観と行き交う船舶が醸す活気が人々に愛されていた。またグリニッチは18世紀以来、ロンドン市中から手軽に行けて自然の中で遊べる郊外としてロンドン市民の憩いの場所であった。そういう歴史的意義をも考慮した「戦略的眺望地点」の選択と考えられる。

しかしそれにしても、グリニッチ・パークはセント・ポール大聖堂からおよそ7.5キロメートル離れている。ロンドンの眺望景観保護は広域にわたっている。眺望地点4のリッチモンド・パークに至っては16キロメートルも離れている。そこからの眺望を保護しようというのは、目下経済成長を続けるイギリスの首都にとって大きな課題となるはずだ。

### 都市開発と眺望保護

事実その通り、この8箇所の眺望地点の中でも特にリッチモンド・パークについては論議がまびすしいので、ここで取り上げよう。この眺望地点となっている「ヘンリー8世の築山」は13世紀より王室の離宮があった土地で、ヘンリー8世(1491-1547)はパークの高台に立って狩りの模様を見たりロンドンを眺めたりしたと伝えられることからその名がついた。この場所から王はロンドン塔の方を見やり「2人目の妻アン・ブーリンが処刑されたことを告げる狼煙を見守っていたと言われる」(蛭川他 601)。この場所は1710年にセント・ポール大聖堂が完成した頃から、大聖堂の眺望のために整備された。ロンドン市長(シティではなくロンドン全域の市長)がロンドンには超高層建築が必要だという見解を示したのに対して、リッチモンド・パークは、この「300年の歴史ある眺望が、ロンドン市長の規制緩和方針によって失われようとしている」という声明を出している<sup>(7)</sup>。

ケン・リヴィングストン市長の持論は、ロンドンが世界の金融・経済競争で生き残るためには、現在申請が相次いでいる超高層ビルが建てられるような建築規制緩和が必要だというものである。市長は「リッチモンド・パークからセント・ポール大聖堂など見えない」と発言して物議を醸した(Bar-Hillel, 6 March 2003)。BBCニュースもリッチモンド・パークからの眺望を取り上げて、「周囲の現代的な建造物がつげの生け垣によって入念に隠されて、この「鍵穴」から見える18世紀のランドマークの眺望は、ロンドンの過去へと開いた窓のようだ」と、この眺望を歴史的な文脈で評価している(Shukor, 4 June 2007)。

BBCニュースがリッチモンド・パークからの眺望を取り上げたのは、規制緩和を目指すリヴィングストン市長が眺望保護の見直しを発表したからである。市長のガイドラインでは、建築規

制のかかる眺望地点からセント・ポール大聖堂までの「コリドール」(“corridor” 眺望の幅)が平均して半分に狭められた。リッチモンド・パークでも「コリドール」を半分以下に狭められたために、この「鍵穴眺望」も近い将来、林立する摩天楼によって損なわれるかもしれないという声がBBCニュースで紹介されている。たとえばロンドン議会議員の「文化遺産という見地から見れば、それは非文化的蛮行だ」という発言、庭園設計家の「新ガイドラインはロンドンのスカイラインを破壊するものだ」「象徴的な眺望は都市のアイデンティティであり、感情に訴えかける力を持っている」「ロンドン新しいものと古いものをうまく混在させてきたが、市長の新ガイドラインはこのバランスを崩すものだ」という発言を紹介している (Shukor, 4 June 2007)。

BBCニュースの写真では茂った並木の間から大聖堂のドームが確かに見えているが、16キロメートルも離れていることを考慮すると、この大聖堂の姿はいわば「お宝眺望」だと言える。しかもリッチモンド・パークの声明文によれば、第2次大戦中に庭園を管理する人々が従軍したために戦後も公園の木々が伸び放題のままになって、この眺望は30年間失われていた。それが1976年に「再発見」されたというのである。再発見されたこの眺望が、その後の都心部再開発において高層建築の林立を防ぐことにつながったとして、声明文は高く評価している。眺望がいったん失われて再び発見されたことにもまた歴史的な価値が付与されるのである。

### 3 「戦略的眺望地点」は何を守っているのか？

前節でロンドンの中心部だけでなく、郊外からのセント・ポール大聖堂の眺望がいかに重要視されているかが確認されたわけだが、ではセント・ポール大聖堂の眺望を守ることにこれほどまでに熱い議論が戦わされるのはなぜか、ここで考えたい。

#### 文化遺産としての眺望

セント・ポール大聖堂は、それ自体が歴史的建造物であり、その姿が首都の象徴である。それにとどまらず、ある地点から見える大聖堂の眺望もまた、文化遺産と見なされているのである。リッチモンド・パークからの眺望はイギリスの歴史と深く関わっている。眺望の保護は、現在見えるセント・ポール大聖堂の姿を守るだけではなく、眺望の歴史自体を守るのである。ロンドン北部やテムズ河畔からの眺望や、グリニッチ・パークとリッチモンド・パークについて考察したことからも分かるように、8つの戦略的眺望地点の選択には、その地点自体が持つ歴史的価値と、そこからの眺望が昔から絵画の構図となってきた伝統や、その地点からのセント・ポール大聖堂の眺望が長らく愛されてきた歴史的裏付けがあることが推測される。

これは、どんなロンドンのイメージを保護し、今後創造しようとするのかという問いに対して、一つの明確な姿勢を示すものである。全く現状のまま保護するわけではない。眺望地点を定めてそこからの「コリドール」の範囲内での開発には規制をかける、そこからはずれる地域では開発も許可し得るという姿勢である。

この姿勢に対して、ロンドンは高密度開発を必要としているし、デザイン性の高い高層建築は新しいロンドンを象徴する、という立場を取るのがリヴィングストン市長であり、再開発によって都市を活性化させるべきだと考える人々、好景気の中、開発プロジェクトを進めたい人々、そして自らデザインした超高層建築を発表したい建築家たちである。それだけではない。ほかならぬシティが、金融大手をはじめとする大企業の、シティから再開発が進むロンドン東部テムズ河畔カナリー・ウォーフへの移転が進むのを食い止めたいという、シティのアイデンティティの危機感から高層ビル建設を促進させるかもしれない。

シティの東方には超高層ビルの群が見える。ロンドンの優れた、あるいは奇抜な建築デザインには愛称あるいはあだ名が付くものだが、デザインが発表された時からその形のために“Gherkin”（「ガーキン」＝キュウリのピクルス）と呼ばれている高さ180メートルのガラスの塔もその群の中にある。このビルは2003年に完成する前からそのデザインゆえに賛否両論が沸き起こった。そのために知名度が上がり、現在では人々はすでにその姿に慣れ、ロンドンを舞台にした映画ではよくロケに使用されもして、ロンドン眺望景観の名物になったように思われる。

林立するクレーンは、好調な経済が再開発を促している現状で過去の姿をそのままとどめることは不可能だと示しているようである。しかし私たちの目には見えない「コリドール」と呼ばれる眺望の太い帯が、セント・ポール大聖堂を中心に、シティのまん中からロンドン郊外へと放射状に延びることによって、ロンドンの基本的な形を保とうとする努力がなされている。その形とは、1937年に定められた「セント・ポールズ高さ規制」が保とうとした形である。それは1666年のロンドン大火後から歴史的に積み重ねられてきたロンドンの形であった。戦略的眺望地点の設定は、開発を認めながらも、都市の相貌が急激に変化するのを抑制し、歴史が積み重なって形成された都市の形を保存するために必要な、未来への約束だと言うことができるだろう。

#### 4 京都の景観政策のために

都市のイメージは静的なものではない。時代に応じて意図的に構築され得るものであり、変容していくものである。都市にとってモニュメントとしての建築は都市のアイデンティティを形成する。そのために19世紀中期のパリはオスマンによる大改造でバロック式の「みやこ」の顔を整えた。19世紀後半のウィーンが新しく整備された環状道路沿いに巨大で華麗な公共建築を次々に建てていったのも、富裕中産階級中心の洗練された「みやこ」を建築によって演出するためであった。各都市はかように政治経済力を持った人々が演出したい「みやこ」のイメージを意識して形成されていったのである<sup>(8)</sup>。ロンドンにおける超高層建築に関する論争も、21世紀の経済力を持った新しい「みやこ」のイメージを構築すべきか、過去に依拠したイメージを保護すべきかの論争という側面を持っている。



## 京都の中心はどこか

翻って京都は今後どんな都市のイメージを構築していこうとするのか。

京都市の新景観政策にも、ヨーロッパ都市の景観政策が活かされていると思われる。そこでロンドンと比較して京都について考えてみると、ロンドンにおけるセント・ポール大聖堂のような、京都にアイデンティティを与える京都の中心と呼べる場所があるだろうか。

そもそも京都という都市のイメージ自体が、セント・ポール大聖堂が持つ二重の象徴性を担っている。ひとつには平安京以来の王朝文化の伝統を今日も保っている古都というイメージ、もうひとつはシティのように町衆の自治によって繁栄した文化都市としてのイメージである。それぞれが現在も葵祭と祇園祭という形で視覚化され、京都市民に親しまれていると同時に、観光対象になっている。しかし祇園祭の氏神である八坂神社が京都の中心として認知されているとは言い難い。では御所はどうか。

京都御苑は市内中心部にある。その意味では京都の中心と呼べるかもしれない。今日の京都の原型が形成されるのは江戸前期であり（森谷181）、現在の京都の形は平安京とはずいぶん異なっているのだが、京都が平安京の形を歴史的にとどめる都市というイメージは日本人の間に定着しているだろう。そのイメージは御所の中心性を前提とする。高木によれば1754年版行の『名所手引案内』における京都ガイドの記述は桓武天皇による平安京造営に始まり、挿入された唯一の挿し絵が公卿参内図であることから「京都イメージの象徴として公卿門が選り取られている」（高木108）。つまり内裏空間は一番の観光名所であり、京都の象徴的中心と認識されていたと言える。

しかし明治時代以降、神秘的な空間へと変貌した御所は久しく「空虚な中心」と呼ぶべき存在となっている<sup>(9)</sup>。もはや京都のアイデンティティを一身に支える存在ではない。

京都には、セント・ポール大聖堂のような象徴的中心がない。それゆえに、眺望政策は保護すべき場所ごとの眺望としてきめ細かく捉えられ、場所ごとの緻密な設定を要する。そのせいもあるのかもしれない。都市計画の素人である一般市民（私もそのひとりなのだが）にとって各「視点場」からの眺望保護の総体を、都市の全体像として視覚的に理解しにくくなっている。これからは、文化遺産とは市内に点在する古い建築物や庭園だけでなく、市内を錯綜する眺望の、目に見えない太い帯や扇型もまた文化遺産なのだという意識を市民の間に育成することが必要であろう。

## 京都自体のイメージ保護の意義

先ほど、京都には中心がないと述べたが、視野を広げて日本の中の京都という観点からみれば、むしろこう言うべきかもしれない。京都とセント・ポール大聖堂が持つイメージの類似性に目を向けるならば、京都は日本のセント・ポール大聖堂なのだ。セント・ポール大聖堂の眺望を保護することが、イギリスの歴史とアイデンティティを保護することになってきたのと同様、京都の姿を保護することは日本のアイデンティティを保護することにつながる、ということである。

ことは京都の自治体や市民の問題にとどまらない。

世界経済の中心というシティのアイデンティティが揺らいできた時代、セント・ポール大聖堂の眺望を守ることが、そのアイデンティティを守ることと齟齬をきたす可能性も出てきた。ロンドンはその眺望の帯を狭めることによって、開発を推進するかもしれない。超高層ビルといってもロンドンでは全体にニューヨークなどよりずっと低いのだが、近々ヨーロッパー高いロンドンブリッジ・タワーの建設も予定されている。ロンドンが摩天楼都市になることに抵抗を覚える市民は多いだろう。それとも斬新なデザインの高層ビルの建設のみを許可して、建築デザインの見本市的な都市の姿をその魅力にするのか。テムズ川沿いに佇んで周囲に点在する奇抜なデザインの建築を眺めると、そのような感懐も浮かんでくる。ロンドンは自らの都市イメージについて熱い論争を繰り返してきたし、これからもそれは継続されるだろう。

シティの経済基盤が沈下する不安はあるが、観光資源としてのセント・ポール大聖堂は2001年以降、地盤沈下に歯止めをかける新たな眺望を獲得した。ミレニアム・プロジェクトの一環として2000年にテムズ南岸サウスバンクに旧発電所を改築したテイト・モダン美術館がオープンし、新たなロンドン名物となっている。2001年にはテイト・モダンとテムズ北岸を結ぶ歩道橋ミレニアム・ブリッジが開通した。この美術館と橋によって観光客の流れがサウスバンクとシティに導かれるようになった。テイト・モダンとミレニアム・ブリッジから眺めるセント・ポール大聖堂の姿がロンドンの人気ある眺望景観となっている。

新しいものと古いものの調和という、ロンドンも抱えた問題を京都も、そして日本も抱えている。市内中心部にも山麓にも世界遺産が点在する京都が今後、歴史文化都市として生き残るためには、建物などの形ある文化遺産自体の保護だけでなく眺望景観の保護に力を入れるべく、長期にわたって自治体の意志を固めなければならないだろう。はじめにも触れたように自然との調和が京都の独自性だ。セント・ポール大聖堂の眺望がイギリスにアイデンティティを提供してきたように、自然との調和景観を保護することが京都の存在意義となり、ひいては日本のアイデンティティを提供する。ただし将来セント・ポール大聖堂の姿が超高層建築に阻まれて見えにくくなっていき、その中心性が失われていく可能性があるように、京都のイメージが、日本の歴史を語る代表的な姿として永らえるのか、古都イメージが強化されるのか、それとも日本の他の場所と変わらぬ景観を呈する一地方都市のイメージになるのか、あるいは新たなイメージを獲得するのか、その答えは眺望保護いかにかかっている。

ロンドンは眺望が文化遺産であるという考え方に長い歴史があり、「セント・ポールズ・ハイツ」という画期的な保護政策の実績があり、現在も眺望保護と開発の間で論争が続く都市だ。今後の変容の可能性も含め、ロンドンの事例はモデルとしても反面教師としても、京都にも大いに参考になるはずである。

## 註

\*この論文は平成18年度科学研究費補助金基盤研究(C)に採択された「京都とヨーロッパ主要首都のイメージの生成・受容・流布・変容に関する比較文化研究」(課題番号:18600007, 研究代表者:野口祐子)の研究成果の一環として発表するものである。

\*英語文献からの訳は全て拙訳である。

- (1) この点については、京都府立大学文学部公開シンポジウム「「みやこ」の姿を考える～京都・ローマ・ロンドン・ダブリン・ニュルンベルク～」(2006年11月18日, ハートピア京都)において明らかにした(「パネル・ディスカッション:京都におけるみやこの演出—ヨーロッパとの比較の視点から」パネリスト:青地伯水・浅井学・加藤丈雄・野口祐子・水本邦彦・宗田好史)。京都府立大学文学部の水本邦彦教授からは、安土桃山時代から江戸時代における京都の描かれ方の変遷, また東寺五重塔の描かれ方の変遷について, 同シンポジウムにおける発表をはじめ多くの教示を得た。
- (2) この点については拙論「世界一の帝国首都は二流のみやこ—ナポレオン戦争後のロンドンにおける矜持と不安の言説, および明治期京都への視点」『京都府立大学学術報告 人文・社会』第58号(2006年12月)で論じている。
- (3) この点については拙論「橋が創るみやこのアイデンティティ—ロンドン橋と京の橋をめぐって」平成17年度京都府立大学地域貢献型研究助成金研究成果報告書『「みやこの思想・みやこの表象」—京都とヨーロッパ主要都市のイメージの生成・変容・受容に関する比較文化研究』2006年3月(研究代表者:野口祐子)20-22において論じた。
- (4) 大聖堂の内部ももちろん名所として外国からの観光客もよく訪れる場所であった。セント・ポール大聖堂とウェストミンスター・アビイというロンドンの東西ライバルによる拝観料ばつくりと拝観制限への批判については、オールティックIII, 211-56参照。その拝観の仕方への不満のために、19世紀にはセント・ポール大聖堂の内部は外から眺める姿ほど人々に満足を与えなかったようだ。
- (5) “St. Paul’s Heights”と超高層ビル論争については福川他61-119, 第二章「ロンドンの超高層ビル論争」に詳しい。
- (6) *City of London Unitary Development Plan 2002*. “Chapter 10: Environmental Quality”; “Supplementary Planning Guidance: St Paul’s & Monument Views.” Department of Planning & Transportation. Corporation of London, 2002.
- (7) “300 Year Old View Threatened by Mayor’s Plans”. Richmond Park: Press. 5 May, 2003-1 January 2004. [http://www.royalpark.org.uk/press/archive/press\\_release\\_39.cfm](http://www.royalpark.org.uk/press/archive/press_release_39.cfm)
- (8) 19世紀から第1次大戦前のロンドン・パリ・ウィーンについてはドナルド・J・オールセン『芸術作品としての都市』(芸立出版, 1992)に詳しい。
- (9) 近世の内裏空間から明治時代の京都御苑への変化が持つ意味については、水本邦彦教授と高木博志『近代天皇制と古都』(岩波書店, 2006)から多くの教示を得た。

## 引用文献

- Bar-Hillel, Mira. “London’s Best View Under Threat”. *Evening Standard*. 6 March, 2003.
- Barker, Felix. and Ralph Hyde. *London As It Might Have Been*. London: John Murray, 1982.
- Bills, Mark. *The Art of Satire: London in Caricature*. Museum of London Catalogue. London: Philip Wilson Publishers, 2006.
- City of London Unitary Development Plan 2002*. “Chapter 10: Environmental Quality”; “Supplementary Planning Guidance: St Paul’s & Monument Views.” Department of Planning & Transportation.

- Corporation of London, 2002.  
[http://www.cityoflondon.gov.uk/NR/rdonlyres/65CCEAEE-662D-493E-89FC-576533BA926C/0/st\\_pauls\\_monument\\_views.pdf](http://www.cityoflondon.gov.uk/NR/rdonlyres/65CCEAEE-662D-493E-89FC-576533BA926C/0/st_pauls_monument_views.pdf)
- Daniels, Stephen. *Fields of Vision: Landscape Imagery and National Identity in England and The United States*. Princeton, New Jersey: Princeton UP, 1993.
- Galinou, Mireille. and John Hayes eds. *London in Paint: Oil Paintings in the Collection at the Museum of London*. London: Museum of London, 1996.
- Lyster, Grania. *A Guide to The Wallace Collection*. The Trustees of the Wallace Collection, 4th ed. 2005.
- Punch, or The London Charivari*. 8 August 1863; 6 September 1890.
- Richardson, Margaret. and MaryAnne Stevens eds. *John Soane, Architect: Master of Space and Light*. London: Royal Academy of Arts, 1999. Exhibition catalogue.
- Sawyer, Sean. "The Procession Route," in Margaret Richardson and MaryAnne Stevens eds., *John Soane, Architect: Master of Space and Light*. London: Royal Academy of Arts, 1999. Exhibition catalogue.
- Shukor, Steven. "London's Historic Views 'Under Threat'." BBC News 24. 4 June, 2007.  
[http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk\\_news/england/london/6712137.stm](http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/england/london/6712137.stm)
- Townsend, Sue. *The Secret Diary of Adrian Mole, aged 13 3/4*. New York: Harper Tempest, 2003.
- オールセン, ドナルド J. 『芸術作品としての都市』芸立出版, 1992。
- オールティック, R. D. 『ロンドンの見せ物』第I-III巻, 小池滋監訳, 国書刊行会, 1990。
- キャナダイン, デイヴィッド「コンテクスト, パフォーマンス, 儀礼の意味——英国君主制と「伝統の創出」, 1820-1977年」(辻みどり, 三宅良美訳), エリック・ホブズボウム, テレンス・レンジャー編『創られた伝統』紀伊國屋書店, 1992, 163-258。
- 京都市啓発リーフレット「新景観政策一時を超え光り輝く京都の景観づくり」京都市都市計画局, 2007。
- 国立西洋美術館編「ターナー展」図録。日本経済新聞社, 1986。
- 高木博志『近代天皇制と古都』岩波書店, 2006。
- 野口祐子「橋が創るみやこのアイデンティティー—ロンドン橋と京の橋をめぐって」平成17年度京都府立大学地域貢献型研究助成金研究成果報告書『「みやこの思想・みやこの表象」—京都とヨーロッパ主要都市のイメージの生成・変容・受容に関する比較文化研究』2006。
- 野口祐子「世界一の帝国首都は二流のみやこ—ナポレオン戦争後のロンドンにおける矜持と不安の言説, および明治期京都への視点」『京都府立大学学術報告 人文・社会』第58号, 2006。
- 蛭川久康他編著『ロンドン事典』大修館書店, 2002。
- 福川裕一, 矢作弘, 岡部明子『持続可能な都市—欧米の試みから何を学ぶか—』岩波書店, 2005。
- 森谷尅久編『図説京都府の歴史』河出書房新社, 1994。

(2007年9月26日受理)

(のぐち ゆうこ 文学部教授)